空襲の記憶語り継ぐ　岐阜

2021/07/10 05:00

◆「つどい」2年ぶり開催

１945年7月９日の岐阜空襲から76年となった9日、「岐阜空襲のつどい」が岐阜市のハートフルスクエアーGで開かれ、空襲体験者が戦争の悲惨さを訴えた。

岐阜空襲は7月９日から10日未明にかけて起きた。岐阜市内は米軍爆撃機B29の　焼夷（しょうい）　弾攻撃により、約900人が犠牲になったとされる。

つどいは市民団体「岐阜市平和資料室友の会」が主催した。岐阜市の白木淑子さん（93）は、姉と弟の3人で空襲から逃げたといい、「逃げていると、ちょうちんのようなものがちらちらと落ちてくるのが見えて、岐阜駅の方を見ると火の海だった」と回想。空襲の2日後に市内に入ると、「とても熱く、人の遺体がまだあった」と語った。

白木さんの親戚で同市の乾乃武子さん（89）は、空襲で周りの家のわらぶき屋根が燃えて飛んできたところを母やおば、妹と懸命に消火したといい、「戦争は心も体もぼろぼろにした。こんなに悲しいことはない」と強調した。

つどいは、昨年は新型コロナウイルスの影響で中止となり、2年ぶりの開催となった。